

栄養状態と摂食嚥 下機能の関連性の 検討

手稻溪仁会病院
言語聴覚士 丸山研太

研究目的

- 現在、肺炎で死亡する方は国内で年間およそ12万人と推計されている。死亡する方のほとんどが65歳以上の高齢者であり、その中には誤嚥性肺炎患者が多く含まれている。誤嚥性肺炎は摂食嚥下機能の低下した高齢者に多く発生しているが、高齢者では発熱、咳、痰といった肺炎の典型的な症状に乏しい場合があり、また唾液誤嚥時や食事摂取時のむせが見られない不顕性誤嚥も特徴的である。そのため重篤な誤嚥性肺炎を来す前にリスクを事前に把握することは重要であると考えられる。本研究では誤嚥性肺炎患者の栄養状態に着目し、入院時の栄養状態と摂食嚥下機能を評価し、栄養状態不良が摂食嚥下機能に与える影響を検討した。

先行研究

- 1)急性期病院における誤嚥性肺炎患者の転帰に関する要因について
(大場ら;2017)
 - ・誤嚥性肺炎で入院し、その後自宅退院した群、転院した群で比較
 - ・結果、転帰先に影響する要因としてADL能力の低下が最大の要因
- 2)当院における嚥下障害を有する高齢者の臨床的検討
(飴矢ら;2018)
 - ・嚥下機能が低下した入院中高齢者に対する嚥下リハビリテーションの効果や嚥下障害の予後予測因子を経口摂取・非経口群に分けて検討
 - ・結果、47.5%の患者が経口摂取可能となり嚥下反射惹起、咽頭クリアランスの改善が優位であったと報告

対象および方法

- 対象 : 2018年12月～2019年5月までに誤嚥性肺炎の診断で入院され、STが介入している患者35名
- 除外基準
 - 死亡例
 - 入院中に二次的合併症を発症していない
 - 既往に脳血管疾患がない
- 方法
 - 自宅退院群と転院群の2群に分けて両群間を比較
 - 統計解析にはSPSS (Ver.21) を使用しMann-WhitneyのU検定、 χ^2 二乗検定を用いて検討した。有意水準は5%未満とした

検討項目

- ①性別
- ②年齢
- ③FIM
- ④下顎
- ⑤舌
- ⑥口唇の運動範囲
- ⑦咽頭感覚
- ⑧RSST
- ⑨MWST
- ⑩喉頭挙上範囲

結果

- Mann-WhitneyのU検定より2群間の有意水準を抽出

検討項目	年齢	FIM	下顎	舌	口唇	咽頭感覚	RSST	MWST	喉頭挙上
有意水準	9.29	2,81	1.69	1.69	1.69	4.47	0.08	2.32	3.46

- 2群間の比較でRSSTで有意水準を認めた

考察

- RSSTは30秒間に唾液嚥下を連続的に行うものであり、回数によって嚥下障害の有無を抽出するスクリーニング検査である。RSSTが困難な患者は嚥下前や嚥下中の誤嚥リスクが高くなる。低栄養では骨格筋の筋肉量や筋力低下が生じることや、脱水や口腔乾燥により唾液の粘性度が上がってしまうことから、摂食嚥下関連器官の円滑な運動を阻害し、RSSTの低下に繋がっていることが考えられる。誤嚥性肺炎予防のために栄養状態の改善が有効であり、その為には食形態の調節や代償手段の使用を用いること、間接的嚥下訓練を並行して行い摂食嚥下機能の向上が重要であると考えられる。

引用文献

- 1) 摂食嚥下リハビリテーション 第2版
- 2) 廃用症候群リハビリテーション
- 3) 急性期病院における誤嚥性肺炎患者の転帰に関する要因について 2017:大場ら
- 4) 当院における嚥下障害を有する高齢者の臨床的検討 2018:飴矢ら